

世にも幸せな冒険者・・・達？

優すけ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

いまでないとき。ここでない場所。

この物語は、ひとつのパラレルワールドを舞台にしている。

そのファンタジーゾーンでは、アドベンチャーたちが、それぞれに生き、さまざまな冒険談を生みだしている。

あるパーティは、この世にはびこる悪を倒す為、スーパーロボットに乗り込んで宇宙へと旅立った。

あるパーティは、裏世界の悪魔を倒す為に、世界中のありとあらゆる建物へ忍び込み、根こそぎ金品を強奪していった。

あるパーティは、あまりにも強過ぎるが故に、毎日居酒屋で呑んだくれては馬鹿騒ぎしていた。

わたしはこれから、そのひとつのパーティの話をしたと思っています。

彼らの目的は……まだ、多分恐らく……ない。

# 目次

ヒーelnニントの災難・・・	
ヒーelnニントの災難・・・	1
ヒーelnニントの災難・・・	2
ヒーelnニントの災難・・・	3
ヒーelnニントの災難・・・	4
ヒーelnニントの災難・・・	5
ヒーelnニントの災難・・・	6
ヒーelnニントの災難・・・	7
ヒーelnニントの災難・・・	8
ヒーelnニントの災難・・・	9
謎の地下工場・・・	
謎の地下工場・・・?	
前編	47

# ヒールニントの災難・・・ ヒールニントの災難・・・1

ここは、辺境の国にあるトトカンタ市。そこに存在している戦闘要員養成学校『牙の塔』・・・あらゆる人材が集められ、そして訓練・教育されている。

そしてそんな学校の中に、ある一つのクラスがある。

『ゴンタ教室』

学校のごく片隅にポツンと存在しているその教室には、『非常に』個性的なOBがたむろしている。教師の名前はゴン・ゴンタ。既に卒業している生徒(?)達を纏める存在であるだけに、その実力は折り紙付きである。

さあ、その教師が担任を務める教室を覗いてみようではないか。果たしてその中では、どんな光景が繰り広げられているのだろうか・・・今日も一日が始まる。

・・・  
・・・  
・・・

「おう!! 今日誰が来てやがる!？」

教室の戸を勢いよくガラツ!!と開けた、黒髪短髪の大柄な紫ジャージの男。顔にはナナメに走った傷に目付きの悪い三白眼。40を超えたとは言え、まだまだそこらの生徒には追いつけない気迫を醸し出している。その彼が目にした光景は・・・

「ほい、それロン」

「チクシヨくく!! やっぱその捨て牌はブラフだったか!!」

「ぐふふ・・・まだまだ甘いですねぇ、トラップ?」

「まあクレイは普段不幸なだけに読みは深いからね」

男三人に女一人が雀卓を囲んで麻雀を打っていた・・・。

このクラスは卒業しつつも定職に就けない『特別』な生徒(?)が集まった教室であり、尚且つ実力だけは皆桁外れなだけに始末が追えない。

まず今日出席していたのは、冷静に麻雀の役を揃えてお茶を啜っているクレイ・S・アンダーソン。黒髪に鳶色の目でなかなかのイケメンだが・・・故郷に許嫁がいる為に、言い寄る女の子を全て断つていくという罪作りな男である。

その横で頭を抱えて叫んでいる赤毛の男がトラップ。これはあくまで通名で本名は別にあるのだが・・・まあ本作を読んでくださる読者ならわかる人が多いだろう。どうしても知りたければ是非原作を読んで頂きたい。

ニヤニヤと牌を自動卓の中に流し込んでいる小柄の男がキットン。ボサボサの髪で目元が隠れている為、表情がとても読みにくく意外とギャンブルは強い。今回はどうやらワザとトラップを陥れた様子である。

苦笑いしながらノートに記録をつけているのが、パステル・G・キング。金髪に近い明るい色の髪をふわりと後ろで束ねている女で、成績はトントトン。学生時代は少し残念体系だった彼女も、卒業時には『それなりに』育っていた。

「今日はお前らだけか。他の奴らはどうした?」

ゴンタが教室内を見渡しながら四人に声をかけると、顔を上げたパステルが説明する。

「えっと、林水会長とお蓮さんは生徒会の仕事。ノルは確か他の任務に行ってる筈です」

「あ、ちなみにルーミイとイルイ、アルフィミイはどっかで遊んでるぜ」

点棒をクレイに投げ渡しながらトラップが続ける。それを聞いたゴンタは腕を組みながら俯く。

「ちなみに、熱血バカ勇者にブラコン賢者は?」

「「「さあ〜?」」」

このクラスは他のクラスと比べるとかなりの少人数だが、それでも

皆の行動をいちいち把握はしていない。出席も自由で、休みも勝手。それでもわざわざこの教室に来る目的と云えば・・・

「・・・まあ良い。お前らだけでも充分だろう。ほれ、任務書だ」

「うひゃひゃひゃ!! 任務きましたよ〜!!」

キツトンが不気味な笑いを浮かべながら、ゴンタから書類の入った封筒を受け取る。そう、この学校は世界中からあらゆる事件・問題を任務としてこなしていく仕事を請け負っている。

特にこのクラスには『少し』ややこしい任務が回される事が多く、その分報酬も弾まれていた。

「場所はヒールニントの山奥。詳しい内容はその任務書に書かれている。近くの村までは輸送ヘリで送ってやるから、解決したら連絡いれろ。以上だ」

「二二へえ〜い」

気の抜けた声を上げた四人は、そのままいそいそと卓に座りなおし、賽を振り始める。

・・・

・・・

・・・

「おい、お前ら。行かねえのか?」

「え? いや俺たち今から南二局なんで・・・」

「装備を整えてさっさと行きやがれ!!」

・・・

・・・

・・・

カランコロン・・・カランコロン・・・

「こ、この音は・・・!?」

「や、奴らが来たんだ・・・」

「ゴンタ学級の奴らだ!! 早く逃げろ!!」

「関わると命が危ないぞ!!」

学校内にあるヘリポートへ向かう四人の前は、まるでモーゼの十戒のように人が割れていく。この音を聞いた者はいち早く離れるのが長生きのコツであるのは、入学して一番最初に知る教訓である。

「全く、失礼な奴らだよな・・・俺たちが何をしたんだよ」

「うくん、途中から数えるの忘れちゃった♪」

無然とした表情のまま彼の代名詞（笑）である竹アーマーを鳴らしながら歩くクレイに、テヘツと笑うパステル。昔はクロスボウを愛用していた彼女だが、撃てば必ず味方に当たるという不思議な（？）能力により全員から封印されており、今は不思議な形状の杖を持っている。

「ま、いつもの事じゃねえか。今日はノルが暴走しないだけまだ有情だぜ?」

「そうですそうです。私達はいわば、この教室の善玉菌ですよ」

派手な服に緑のタイツを履いたトラップがピューっと口笛を吹くと、さつきと同じ服装にクワとカバンだけを持ったキットンがギャハハと笑う。

「でもなく、俺たちももう10年以上ここにいるんだぜ? 少しくらいマシになっても・・・」

「甘い甘い甘い甘々い!! むしろ年々増加していつてると考えるのが普通なんだよ!!」

「ほくら、もうすぐ着くわよく? そろそろ黙りなさい」

苦笑いしているクレイに、ビシツと指を指して断言するトラップ。そんな彼らに、ヘリから吹く風に髪をたなびかせているパステルが声をかけた。そろそろ出発時間である。

「置いて行かれても知らないわよく?」

「ギャハハ!! そんな命知らずな方は教師陣以外にはいませんよ!!」

「・・・まあ、そうかしら・・・」

ヘリの音にも負けないぐらいの音量で笑い声を上げるキットン。悲しい事に、これは現実である・・・そうこうしている内に搭乗口へ到着した彼らを迎えたのは、緊張した面持ちのパイロット2名。敬礼する彼らの身体が強張っているのは、きつとただの緊張だろう・・・

多分。

「お待ちしておりました!! では早速搭乗を!!」

「あいよく。安全運転で頼むぜ〜?」

「二命に変えましても!!」

そしてへりは飛び立つ・・・彼らを乗せて。

その先に待つヒールニントの運命はいかに・・・合掌。



## ヒールニントの災難・・・2

「ふむふむ、ヒール山の周辺で謎の生き物ですか・・・まあ我々に依頼するぐらいですから、『よっぽと』切羽詰まってるんでしようねえ〜」

現地へ向かう輸送ヘリの中で、キットンがブツブツと任務書を読んでいる。大体こういう確認はキットンかパステルが行う事が多い。

「山の中かく、だったら火は厳禁よね?」

「けれど出て来るモンスターによるだろ? 弱点なら積極的に・・・」

「んで山の中腹をパステルの爆弾で吹き飛ばすんだろ? 分かってるつつ〜のww」

神妙な顔をして俯くパステルに声をかけるクレイだが、それをゲラゲラと指差して笑うトラップ。確かに彼女の使う『フラム』の類は、周囲まとめて甚大な被害を及ぼすので使い所が難しいアイテムの一つである。

「そ、それを言ったらアンタの炎だって厳禁よ!」

「バーカ。オレはちやく〜んと調節出来るつつ〜の。お前と違ってな?」

「うう〜!!」

ニヤニヤと笑いながら手元でチロチロと火種を出すトラップに、プク〜と頬を膨らませているパステル・・・それを見たキットンはさらに追撃を加える。

「ドヒヤヒヤヒヤ!! 一番威力の低い物でも簡単に周囲を吹き飛ばすパステルは、まさに爆弾魔!! 私のようにスマートに相手を調べて皆に貢献しないとイケませんww」

「お、おいおい二人とも。そんなにパステルをいじめるなよ? 大体俺たちは何かしらそんな攻撃を持つてるだろ?」

「だあから〜、それを調節できなきゃ宝の持ち腐れってもんよ!」

「・・・もう良いもん。ぐっすん」

見かねたクレイが宥めようとするも、トラップは甘い甘い指を振る。シヨボンとしたパステルは、窓の外へと視線を向けた。丁度近くを通っていった小型の鳥型モンスターが向かう先を見ると、遠く

に大きな山が見えてきた。どこかあちこちに湯気が立ち上っているようにも見える。

「ねえねえキツトン？ 何だか山から湯気が上がってるんだけど、もしかして温泉？」

「ああハイハイ、確かに任務書には温泉街があるとの事ですよ？ 終わったらのんびり湯治でもしますか」

「わあ〜!! 温泉楽しみ〜!!」

「ま、命の洗濯は大事だよな。くれぐれも爆破させるんじゃないぞ？」

「ノルじゃあるまいし、流石に温泉でそんな事しないわよ」

ケラケラと笑い会う皆の声を聞きながら、ヘリを操縦するパイロットは冷や汗が止まらないのであった・・・強く生きろ（笑）

・・・

「くらえ!! 魔神剣!!」

「はああ〜、稲が出た出た稲が出た〜♪」

「ほくら、そっち行つたぞ〜？」

「え〜!! ちよつと〜!! 逃しちやつたの〜!!」

「ごめ〜ん、パステルちゃん♪」

「絶〜対ワザとでしよ〜!!」

ヒール山へ向かう前に広がる、大きな森。ここはズールの森と呼ばれる静かな場所・・・

「ふう、こんな時広範囲攻撃が出来ないのはめんどくさいよなあ・・・」

「ま、仕方ありませんねえ〜。森なんですし」

「ほくらほくら、後ろ後ろ〜w」

「きや〜〜!! スライムが髪に付いた〜!!」

静かな、場所・・・

「も〜怒つたんだから!! 魔法ロック解除!! みんな纏めて・・・」

「ば、馬鹿野郎!! 早速ソレかよ!？」

「皆、逃げろ〜!!」

「ブヒヤヒヤヒヤヒヤ!! やっぱりこうなりましたね!!」

「いつけえ〜〜!!」

チユド〜〜〜ン  
ドカ〜〜〜ン  
ズバババ〜〜〜ン  
!!!!!!

・・・静か『だった』場所である。

森に入った四人を待ち受けていたのは、この地に多く生息している  
マイマイスライムやラーズアーント。哀れにも本能に従って侵入者  
を攻撃しようと手を出したのが彼らの運の尽き。

最初はクレイのロングソードやトラップのクナイ、キツトンのクワ  
がザクザクと切り刻んでいたのだが・・・トラップがニヤニヤとスラ  
イムをパステルの近くに放ったのが、この周辺の最期。頭に血が上つ  
た彼女が放った『メガフラム』は、半径数十メートルをモンスター諸  
共、全て灰燼と化したのだった・・・

・・・

「も〜、ホント信じられない!! いたいけな乙女に一体何するのよ〜  
!!」

「いやいや、森の地図を書き換えるような『いたいけな』乙女がどこに  
いるよ!?!」

「・・・てへ♪」

『災害地』から充分離れた森の中。命からがら逃げ出した皆は、焚き火  
を囲みながらキャンプをしていた。所々煤で汚れた服を叩きながら  
トラップが叫ぶと、流石に悪いと思ったのかペロツと舌をだすパステ  
ル・・・途中で仕留めたミミウサギを捌きながら、クレイははあくど  
ボヤク。

「やっぱりこうなるんだよな〜・・・」

「ま、パステルですしww」

どこかからか採ってきたキノコを串に刺しながら、グフグフ笑って

いるキットン。パーティーの数少ない良心である二人は、ちまちまと夕ご飯の支度をしていた。今日のメニューはミミウサギのモモ塩焼きにキノコの串焼き、干し野菜のスープである。牙の塔には勿論缶詰やレーシヨン等もあるのだが、ゴンタ学級のメンバーは皆こういう現地調達の食事を好む。彼らに言わせれば、これらもご当地メニューとの事。

「ほら、焼きあがったぞ。熱いうちに食べてしまおう」

「お、美味そうじゃないのクレイちゃん。やっぱり家事が出来る男は違  
うね」

「ホント、この焼き加減もバツチリ!! やっぱり旅行先ではこういう  
のよねえ」

「グフフ・・・このキノコもイケますよ?」

「・・・それ、ホントに食べられるの?」

「大丈夫、デザートですからw」

ワイワイと和やかに食事を楽しむ彼ら。

・・・と、その時遠くから大きな音が近づいてきた。なんだなんだと顔を向ける四人の先から、何者かがやってきたのだった・・・

## ヒーローニントの災難・・・3

「わ、わ、なに?」

「音からして、エレキテルパンサー辺りか・・・」

大きな騒音を出しながら近くにやってきた土埃。勿論食べている最中のご飯は全員で持ち上げて、音の発生源を見る。そこに現れたのは・・・

「よ、おめえら冒険者だろ?」

クレイの予想通り、エレキテルパンサーに乗っていた、やけに派手なジャケットを着たいかつい男が声をかけてきた。

「ま、まあ冒険者資格はありますけど・・・あなた誰?」

「あたし? あたしあくな、こういうもんだ」

少し引きながら返答したパステルに、その男は葉巻を吸いながらすつと名刺を差し出した。

「プルトニカン生命、エベリン支社次長・・・ヒュー・オーシ?」

「おうよ。まあ平たく言やあ冒険者専門の保険屋よ」

スパくつと煙を吐きながら答えるヒューという男。いかにも成金丸出しの雰囲気を漂わせながら、ニヤリと近づいてくる。そして目の前にいたキットンへ指をつきつけた。

「あんた、冒険とはなにか分かるか?」

「それは勿論、生きてくお金を稼ぐありがた〜いお仕事です!!グフフフ!!」

「あ、あはは・・・」

ドヤ顔をしてビシツと答えるキットンの答えに、苦笑いを浮かべるしかないクレイ。少なくとも彼は人助けと自身の鍛錬と思っていたからだ。やはりパーティーの良心は彼だけなのかもしれない・・・  
「そくだお金!! やつぱり金は大事だよなあ〜!? しかしだ!! 冒険ってのは危険がつきもの。冒険中に起こる事故の多さは実に99%以上!!」

待っていたとばかりに身を乗り出すヒュー。しかし、彼らはたった今その1%以下の確立に会ったばかりなのである。胡散臭いにも程

がある。

「そこをビシツと保証するのがこのプルトニカンスペシャルよ!! もし怪我をしても安全確實保証!! 最近はこの辺りでも危ない事件が多いんだぜ〜?」

「え? この近くで何かあるんですか?」

思わず聞き返すパステルに、ニヤ〜と笑ってヒューが口を開く。「おうよ、つい何時間か前のホットな情報よ!! ここから少し離れた場所で謎の連続爆発があつたつて〜のよ!!」

「・・・え?」

思わず言葉が止まるパステル。ちなみに後ろではトラップとキツトンが大爆笑している。あまりの笑いつぶりに大草原不可避である。

ちなみにクレイも横を向いて体を震わせている。

「いやあ〜、あれはヒドイかつたねえ〜。もしあんなのに巻き込まれたとあつちやく〜確実に死んでるね!! そりやくもう間違いない!!」

「・・・」

「しかも木々まで残さず消し炭だ!! よほどの極悪人が非道な実験でもしたんだろうな〜・・・ナンマイダ〜ナンマイダ〜」

「・・・」

張り付いた笑顔のままピクリとも動かないパステル、そして笑いきぎのあまり過呼吸まで起こしかけている三人。両腕を大きく広げて大々的に語る彼に、何とか『下手人』が口を開いた。

「え、え〜と〜・・・ホントに私達はそういうのいりませんので・・・」

「なんだなんだ〜? 金がねえのか? 仕方ねえ、今回のそのクエストで得た報酬。そいつを担保に・・・」

「い、いやその・・・」

「上手い話にや裏がある。ま、それ以前にオレ達にはそんなの必要ねえつての」

口籠もるパステルに助け舟を出したのは、笑いも収まり、キノコの串焼きを頬張っていたトラップである。モグモグと咀嚼した後に飲み込むと、ヒョイとヒューに近づいた。

「大体よく、俺達のどこを見てそれに勧誘しようと思ったワケ? 少

なくともそう見えるほど初心者に見えちまったって事かい？」

「そりやくそうだろ？ そのファイターの鎧は竹を貼り合わせたよ  
うなハリボテ、他の面々も明らかに間に合わせの装備じゃねえか」

ハツと鼻で笑いながら見返すヒューに、同じくハンッと笑うトラツ  
プ。

「おくい、クレイ。どうやらお前の竹アーチャーちゃんが余程気に入っ  
たらしいぜ、この御仁」

「え、このアーチャーか？ そんな普通のアーチャーだけど・・・」

「ブヒヤヒヤヒヤ!! それが普通だったら、世の中のプレートアー  
チャーは全部鉄くずですよ!!」

「まあ、少なくとも普通じゃないよね・・・」

首を傾げて近寄るクレイだが、大笑いしながら指差すキットンとタ  
ハハと苦笑いするパステル。そんな彼らを見てふとニヤケ顔を収め  
たヒューがその『竹アーチャー』を見つめる。

「うゝむ、やっぱりただの竹を繋ぎ合わせただけの・・・」

「ホントあんたって保険屋の癖に見る目がねえよな。ま、分からな  
いならさっさと帰ってくん。そのお大事なパンサーちゃんに乗っ  
てよ?。」

ヒラヒラと手を振って馬鹿にしたように笑うトラツプを見て、顔を  
上げたヒューは腕時計を見た・・・  
「・・・け、15分も無駄にしちまったぜ」

そして苦々しい顔をしたかと思うと、さっさとエレキテルパンサー  
に乗り込んで轟音を立てて立ち去っていく。それを見送りながら続  
きの肉を食べ始めるトラツプに、パステルが口を開いた。

「良かったの？ 本当の事言わなくて」

「良〜んだよ。分かる奴だったらむしろあらゆる手を使って留まるだ  
ろ〜けど、節穴じゃあ意味ねえよ」

「全くですね。このアーチャーの真価も分からないようでは・・・それこ  
そ時間のムダというものですよww」

「うゝん、そんなに持ち上げられるものなのかな・・・このアーチャー」  
釈然としない顔のままスープをすするクレイだが・・・他の三人は

ごく普通の顔をして残りのご飯を平らげていく。もう早目に寝ないと明日の朝が早い。さつさと後片付けをした四人は、大きめの軍用テントにそそくさと潜り込むのであった・・・

・・・

ちなみに、魔法で防御を高めたアーマーはすごく高価である。プラズを一つつけるだけで普通のアーマーが10個は買えるほど。そして彼の竹アーマーは・・・+99。武器防具を大事に手入れするクレイは、少しでもパワーアップ出来る素材があればなんでも竹アーマーに強化させた。その結果、あらゆる属性防御に状態異常耐性・そして物理防御を備えた、伝説の鎧も真つ青な性能となっているのだ・・・合掌。



## ヒーelnニントの災難・・・4

一夜が明け、テントから出て来た四人は簡単な朝食を取っていた。固形コンソメを溶かして干し野菜と昨日狩ったミミウサギの肉を煮込んだスープに、チーズを挟んだサンドイッチ。・・・ちなみに、何度も言うがこれらはゴン太学級の面々のこだわりである。スープならいくらでもインスタントがあるし、上質のレーションやお湯を入れるだけで食べられるご飯なども色々ある。あくまで彼らの矜持というもののなのだ。

「うくん、やっぱりたまにはこういうキャンプみたいなご飯も良いわね。朝の天気も良いし・・・」

「あのなあ、あくまで『たまに』だからな？ 何ヶ月もこんな食生活だったらすぐにぶっ倒れらあ」

「ま、折角の冒険者風の日々なんだ。楽しめる内は楽しむさ」

「それでパステル？ 目的地はここからどれくらいなんです？」

「えつと、ちよつと待ってて・・・あれ？ クレイ、あの封筒どこやっちゃった？」

「え？ 確かパステルが最後に見てなかった？」

「おいおい、頼むぜ二人ともよく？ 任務書無くしたらまたゴン太から大目玉だぜ？」

「ああ、スミマセンでした。昨日私が確認の為荷物から出したんです。グフフ・・・」

「笑ってんじやねえよバカ!!」

わいわいと呑気に朝食を食べながら繰り広げられる光景。そんな中、ふとクレイが顔を上げた。何やら真剣な表情で顔を後ろの方へ向ける。

「・・・どこかで助けを求める声でした・・・」

「ちよ、ちよつとクレイ・・・まさか、また・・・」

「西の方向約二キロか・・・今行くぞ!!」

「・・・まさしく速きこと風の如し、ですなえ・・・」

目を閉じて耳を澄ませていたクレイは、他の三人が止める間も無く

風のように西の方へ消えてしまう。助けを求める者は必ず助ける、それを『少しだけ』過剰に行動に起こしてしまうのが彼の数少ない欠点であった。

「あああ、またクレイちゃんの悪いクセが出やがったぜ・・・おい、さっさと片付けて後を追うぞ!!」

「早くしないと昨日のパステルの二の舞になりますよ!!」

「ちよ、ちよつと何よそれ〜!?　・・・否定が出来ないのが悲しいけど・・・」

普段のトラップよりも遥かに早い速度で走り去った彼を追う事は簡単な事ではない。残された三人は大急ぎでテントと食事の後を片付けるのであった・・・

・・・

「うわあ〜!!　誰か助けて〜!!」

早朝の森の中、大慌てで追いかけてくる何かから逃げているのは10歳くらいの少年。小さな体格を生かして狭い木々を抜けてきたのだが、いよいよ追いつかれる時が・・・

「聖剣技!!　クライムハザード!!」

ドガズガア〜〜〜ン!!!

少年の後方で凄まじい爆音が響き渡り、その数瞬間後に彼は爆風により前方向へ吹き飛ばされた。

「うわあああ〜〜〜!!??」

ゴロゴロと転がって木にぶつかった彼が、何とか顔を起こして振り向いた後方では・・・明らかにさつきまでは無かった直径数メートルのクレーターが出来ていた。

「え、ええ〜〜!!?」

大慌てで目を剥いていると、そのクレーターの中心から一人の剣士が立ち上がった。見た目はごく普通の黒髪の男性。振り下ろしていたロングソードを構え直し、油断なく周囲を見回している。そして何かを見つけたのか、一瞬で姿を消すと・・・

「逃げられると思うな!! 魔神剣・双牙!! 魔神連牙斬!!」

ズガア~~~~ン!!!!

メキメキメキメキ・・・グシャ~~~~!!

新たに左方向から爆音が響いたかと思うと、そのしばらく後に周囲の木々がなぎ倒される光景が少年の目の広がった。あまりにもオーバークルな攻撃にポカ〜ンと口を開けたままの彼だったが・・・いつの間にか目の前に現れていた剣士が優しく声をかけてきた。

「やあ、怪我はないかい?」

少年は後にこう語る。後にも先にも、彼ほど剣一本でここまで森の地形を変えた剣士はいないだろうと・・・

・・・

・・・

・・・

「あくあ、間に合わなかった・・・」

「ま、分かっていた事ですがね!! ギヤハハハ!!」

「何でウチには暴走するところなる奴が多いのかねえ・・・」

「な、何よトラップ? 何が言いたいのよ?」

「べつつにく? 何もパステルの事とは一言も言っていないぜ?」

「ぐぬぬぬ・・・」

ようやく追い付いた三人が見たのは、腰を抜かしている少年に笑いかけるクレイと・・・その後ろに広がるなぎ倒された木々と大きなクレーターであった・・・

「それで、君の名は?」

「やっとお〜目を〜、覚ま〜したかい〜!」

「トラップは黙ってなさい」

スパーン!!

茶々を入れるトラップにハリセンでツツコミを入れるパステル。優しく声を掛けたクレイに、少し怯えた表情を浮かべていた少年だが・・・ようやく自分が助かったのだと実感したのか、オドオドとで

も声を出した。

「ぼ、僕はピット……」

「そっか、ピット君だね。それで、どうして朝からこんな森の奥に？」

「おじいちゃんが……おじいちゃんが大変なんだ!!」

「パステル、すぐにエリキシル剤。キットンは予備のエリクサーを。早くしろ」

「何真顔でとんでもないクスリを頼んでるのよクレイ……」

「ドヒヤヒヤヒヤ!! 普通の病気なら私の薬草で充分ですよ!!」

静かなはずの早朝の森の中、大笑い上げるキットンの声に耳を塞ぐパステルだが、やはりクレイは頭にドがつく心配性。大真面目に二人に手を出す、あっさりとお払いされた。そんな中、ハリセンの一撃から起き上がったトラップが頭をさすりながら口を開く。

「イテテ……とりあえずよ、こんなところで喋ってないでさっさとその爺さんの所へ行こうぜ？」

「あのトラップが、真面目な事を提案している……」

「明日は間違いなく雨ですね。いえ、もしかしたらもうすぐ土砂降りになるのかも? w w」

「燃やすぞお前ら……」

「何をしているお前達。早くお爺さんの所へ行くぞ!!」

「え、ええと……じいちゃんはこつちだよ……」

さっきの爆発がまるで日常茶飯事のように平凡な会話を繰り広げる四人に対して、一応真面目にしていた自分がバカらしくなったのか、少し呆れたような雰囲気歩き出すピットの後をのほほんとして行く四人であった……合掌。

## ヒーelnニントの災難・・・5

そして四人は、ピット少年の案内により件の老人の元へ駆けつけた。

倒れていたその老人だったが、キットンが診た限りでは軽い脱水症状に陥っていただけであった。

「う、うむ・・・すみませんのう、このような老体に気遣って下さって・・・」

「いえいえ、困っている人を助けるのは当然の事ですから」

「全く、クレイちゃんのお陰でまた任務終了までの時間が延びちまつた・・・さつきと片付けねえとゴン太にどやさされるぜ?」

「ううくん、でも仕方ないでしょ? ああなつたクレイを止めれる人なんか、会長ぐらいよ?」

「まあそうですねえ。林水会長ぐらいしか暴走したノルやクレイを制止できる人はいませんからww」

「俺って、そんなに暴走してるかな・・・」

少し腕を組んで悩んでいたクレイだが、彼らを見た老人がふと口を開く。

「そうじゃ、あんたらリズーに怪我などされませんでしたかな?」

「リズー?」

「そうですね。あやつらはこのズールの森に住む野蛮な獣人。その爪はかなりの威力を誇り、傷跡からは悪い病原菌も蔓延るとか・・・」

「・・・それって、クレイがさつきと片付けちゃったモンスター達・・・?」

パステルがふとクレイの方を見ると、彼は後頭部をカリカリと掻きながら苦笑いする。

「悪い、ほとんど確認してなかった」

「全くもう・・・きちんと敵は確認しないとイケないわよ?」

「おいおいパステルよく、お前がそれを言える立場かよお? お前

の方がよっぽど無差別破壊をしていると思うぜ?」

「なによそれ! 私にはちゃんと気配を確認してから・・・」

「ギャハハハハ!! 普段研究室であれだけ爆破しているパステルとは思えませんか!!」

「ゴメン、パステル・・・こればかりは庇えない・・・」

「うわあ〜くん!! クレイにまで言われた〜!!」

老人そつちのけでわいわい騒ぐ彼らに、流石のピット少年や老人も口を開くタイミングが図れない。しかし、とにかくこのままでは前に進まない。一旦彼らを連れてヒールニントに戻るしかないと判断した二人は、何とか日が暮れる前に村へ帰るのだった・・・

・・・

しかし、ようやく村へたどり着いた彼らを迎えたのは、とても『手厚い』対応であった。

「悪いが、このヒールニントにはあんたらを歓迎する人間はいないんでね!!」

「得体の知れん冒険者なんかを山に向かわせられるか!!」

「おい、こいつらを牢にブチ込むんじや!!」

「気の触れた冒険者達から山を守るんじや!!」

村長を含め、集まった村人達からは敵意を感じる視線しか感じなかった。

よくよく聞くと、どうやらその村長は助けた老人（ミシユランという名前らしい）を騙していたらしく、最初からミシユランとピットを見捨てるつもりで村から出したらしい。

昔からよくある固定観念の固まった村らしく、外部の人間を特に毛嫌いする集落との事。

「あゝ、つまりは村民を助けただけの俺たちを、不当に捕まえるって事?」

「何を言う小僧。ここへ来るからにはそれなりに情報を得ておるのであろう? 欲をかけた輩にホイホイと村の敷居を跨がせるのか」

「うう〜ん、私達としては事を大きくしたくないんだけど・・・」

「小娘が大きな口を開く。四人ぼつちで我々に歯向かえるとでも?」

トラップが腕を組んで睨みつけるも、全くその村長は気にしない。それどころか、パステルの眩きにもしつかりと答える始末である。そしてクワや槍を構えた村人達が六人を囲む。

「これは・・・」

「ま、仕方ないですねぇ・・・」

「ゴン太学級心得、その三・・・」

「理不尽な要求に対しては・・・」

「二」「全力を持って叩き潰す!!」「二」

「いかんラーダ!! 彼らを怒らせては!!」

「はん!! 何を言うミシユラン。お前の眼力も衰えたものだな!! こんな小僧達に何が出来る!!」

ミシユラン老人がラーダと呼んだその村長に警告を発するも、彼は全く聞く耳を持たない。その間にクレイ達は既に円陣を組んでいた。その表情はまさに真剣である。

「分かっているよな、皆・・・」

「当たり前じゃないクレイ・・・ここはいつもの通り・・・」

「・・・トラップ、イカサマは禁止ですからね?」

「へっ、見抜けなかったらお前らが間抜けなだけだろ?」

「それじゃ、せえの・・・」

円陣を組んでいた四人がバツとその場を後ずさると、すかさず全員が片手を空に振りかぶる。そして・・・

「じゃ!!」

「ん!!」

「け!!」

「ん!!」

凄まじいスピードで中央にその手を振り下ろした!! その手は残像を残しており、目まぐるしく形を変えていく!!そして・・・!!

「二」「ほん!!!」「二」

差し出された四つの手。その手が指し示したのは・・・

「よっしや〜!! 今回は俺が頂いたぜ〜!!」

「く・・・負けたか・・・」

「やっぱりトラップはこの手の勝負は強いわよね・・・」

「あの5手目のフェイントに引っかけからなければ・・・」

そう、彼らの師匠方がいる道場『梁山泊』に伝わる超高速ジャンケンである。相手の出す手を読みながら瞬時に手を変えるこのジャンケンは、いざ迷った時に行われる『公平な』解決法であった。ちなみに今回の迷った点とは・・・

「流石に私達全員だと村が消し飛んじやうしね・・・」

「うくん、折角助けたピットやミシユランさんにも悪いし・・・」

「分かっていますねトラップ? あくまで殺しは無しですからね?」

「へいへい、まあ精々手加減しつつ・・・」

「きさまら!! さつきから一体何をしておるのじゃ!! さつきと縄に・・・?」

先程から完全に無視されて激昂しているラーダ村長だったが、何やら彼らの纏う空気が変わったのを感じたのか・・・ビクツと体を震わせて見つめる。

その視線の中、トコトコと無造作に歩き出してきたのは派手な服を着た赤毛の男であった。彼は呑気に周りを見渡すと、皆に聞こえるぐらいの大ききさで声を上げる。

「あく、それじゃ取り敢えず忠告く。抵抗しなければ怪我をさせませえくん。おとなしく降伏しなさい」

簡単にもほどがあるほどの文面に、明らかな棒読み。しかし頭に血が上った村人達が聞く訳が無い。

「ふざけるな!! お前達が大人しくしろ!!」

「これだけの人数に、どうにか出来るとでも思ってるのか!!」

「言い訳は牢で聞く!!」

激昂する村人達に、一応最後通告を行ったトラップはすつと人差し指を空に向ける。

「・・・?」

「あくミシユランさん? 取り敢えずここから離れましょう。退路の



道は俺達が切り開きますから」

「ほら、ピット君も早く」

「あ、はい・・・で、でも・・・」

「だ〜い丈夫ですよ!! まだ彼は『分別』がつきますから!! ギャハハハハ!!」

「え、え〜と・・・」

残ったクレイ達がミシユラン老人とピット少年を庇い、スツと防衛体勢を取る。そしてトラップが宙に描いた『文字』は・・・

「一応警告はしたからな?・・・竜乃炎式、出やがれ『崩』!!」

浮かび上がった『崩』の文字が光ると、一瞬のうちにトラップの周りに炎の球が無数に浮かぶ。それらが意思を持ったように空中を舞うと、凄まじい勢いで周囲へ降り注いだ!!

チユドドドドドドドドドド~~~~ン!!!

「うわあ~~~~~!!?」

「な、なんなんだこれ~~~~!!?」

「こ、こいつら何者だ!!?」

なるだけ怪我をさせないようにとトラップが配慮した攻撃だったが、その勢いは村人達の武器を根こそぎ打ち砕き、近づこうとした面々の目の前へコレでもかと言わんばかりに凄まじく叩きつけられた。

勿論それだけで終わるゴン太学級では無い。追加とばかりにトラップが手を掲げると、その手が暗い炎に包まれていく。

「誰に対して喧嘩を売ったのか、ゆっくり味わいながら・・・後悔しろや!! 炎殺・黒龍波!!」

ズカババババ~~~~ン!!!!!!

そしてその手から放たれた炎は、まるで龍を思わせる形を取りながら村の中を走り回り、ことごとくの家々をなぎ倒して回った。一応最

低限の集会所はクレイ達が防護アイテムなどを使い守ったが、とにかくヒールニントの村はあつという間に焦土と化した・・・

「あ、ああ・・・何という・・・」

「あゝ、一応これをお渡ししておきますね」

呆然とするラーダに対し、ごく普通の表情で一枚の紙を渡すパステル。ふるふると震える手でそれを受け取った彼は、その目を大きく開かせた。

「こ、これは・・・!?」

「グフフフ・・・私達を初心者冒険者みたいに扱ったのが貴方達の敗因ですねえ〜」

「とりあえず、請求はそこに記載されてる住所にお願いします。ああ、ちなみに最初から我々に対する対応はこのミニカメラで保存・共用してますので悪しからず」

呆然とする彼に、淡々と牙の塔の連絡先の書かれた紙を渡しながら告げるクレイ。理不尽な事に対しては鬼にも悪魔にもなる、それが天下のゴン太学級なのである。受けた恩は倍返し、受けた恨みは百倍返しのが牙の塔なのであった。

「く、くう・・・牙の塔の連中め、哀れな村人に卑怯な手を使いおつて・・・」

「あああ、たまにいるんだよなあ、こういう連中」

「まあ仕方ないかもしれないけど・・・」

「ゴン太学級心得、その一・・・」

「二「卑怯汚いは敗者の戯言!!」三」

・・・  
・・・  
・・・

「あ、一応ピット君とミシユランさんの家は守っておいたからね？」

「あ、はい・・・ありがとうございます・・・」

「う、うむ・・・」

ニコツと微笑むパステルの笑顔は、二人にとって悪魔の笑みにも感

じられたという・・・合掌。

## ヒーelnニントの災難・・・6

そして村を半壊(?)させた四人は、任務書に記載されている地点へ到着したのだった。

そこは一見動物の巣かなにかのように見える、小さな穴が雑草に囲まれていた。

「任務書によるとここなんだけど・・・」

「この中に入ってくわけ?」

「まあ俺たちなら何とか入れそうだな」

「ふむ、トラップ? あなた少し偵察してきてもらえませんか?」

「しゃ〜ねえ〜な。ちと待ってな」

片手に軍用懐中電灯を持ちながら、ゆっくりと狭い穴に降りていくトラップ。

軽く周囲を警戒しながら彼の帰りを待っている三人だったが、意外と早く穴から顔を出した。

「ちよつとぐるつと見て回ったんだけどさ、少し狭い以外は特に問題無さそうだぜ? さっさと行こうぜ」

「そっか。それじゃ先頭はトラップ、次にパステルがマッピングしつつキットン、俺って順番で行くぞ」

「いつも通りの順番ね。それじゃ早く行きましょ?」

「はいはい、取り敢えずトラップには予備のバッテリーも渡しておきますね」

「あいよ」

ゴソゴソと方眼用紙や予備バッテリーを取り出しつつ、四人は穴の中へ入っていくのだった。

・・・

・・・

・・・

ダンジョンの中は確かに暗く狭かったが、軍用懐中電灯のお陰で非常に明るくなっている。多少の狭さは、鍛えている皆にとって大した問題では無かった。

「しかしまあ、依頼してきた連中はどこの奴らなんだ？」

「ヒールニントって書いてあったから、てつきり村の人の誰かかと思ってたんだけど・・・」

「ふむ、まあその辺りは気にする必要ありませんよ？ 要は依頼料をしつかりと上に支払っているかが重要なだけですから」

「ま、そうか。『SEEDは何故と問うなかれ』って言葉もあるしな」  
「私達はSEEDじゃ無いけどね」

相変わらず緊張感の無い会話をしながら進んでいく彼らだったが、ふと先頭のトラップが足を止める。

「ん？ ありや・・・宝箱か？」

懐中電灯で照らされた先にポツンと置かれていたのは、いかにも典型的な古びた宝箱が置かれていた。

「ふくん、まあ一応調べてみるとするか」

「・・・ちよつと待って下さいトラップ。何か変な雰囲気がありますよ？」  
進もうとしたトラップを、少し首を傾げだキットンが制止する。どうやら彼にしか気づかない何かを感じ取ったらしい。

「ん、分かった。任せるわ」

「トラップや私達でも気付かない仕掛けって事？ それってやっぱり・・・」

「ああ、多分精霊関係だろうな」

クレイが宝箱に歩いていくキットンを見ながらパステルに答える。

ちなみに彼らもある程度の気配察知や罠発見は可能である。余談ではあるが、トラップも並の剣士以上に剣術は使えるし、パステルもある程度の武道の心得はある。クレイも聖白魔法を使えるし、キットンは下手なシーフより探索が上手い。あくまで全方面に平均以上の能力を持ち、それ以上に専門分野があると言うだけの話である。

「ふむ、これは・・・下手に触るとワープ罠に引つかかる仕掛けですね。それも巧妙に魔力で隠されていますな」

「んじや、触らないで進めば良いってこと？」

「ハイ、無視して先へ進みましょう」

「全くやれやれだぜ・・・早く帰って酒でも飲んでえよ」

折角の宝箱だったが、罨だと分かりガツクリとするトラップ。しかしそうそう魔力で隠した罨が仕掛けられた宝箱など無い。やはり何か面倒な事が隠されているのではと先へ進む四人は思うのであった。

・・・

「ん？ 何だか向こうの方が明るいぞ・・・」

「ホントね。天井に穴が空いてるのかしら？」

トラップが先の方を照らすと、何やら通路の上から明るい光が見えた。通路自体はまだ先へ続いているが、取り敢えず怪しい所は全部見て回らなければならない。

「んじやちと見てくるわ。お前らは周囲頼むな」

「分かった。気をつけるんだぞ？」

クレイがかけた声にヒラヒラと手を振りながら、空いていた天井の穴に向かって飛び上がるトラップ。音も立てずに消えた彼だが、すぐに顔を下に向けて三人に声をかけた。

「なんかすつげく広い部屋だ。ありやあヒカリゴケでも生えてるんだろな」

「ほお、それはまた・・・危険はありませんか？」

「・・・」

もう一度顔を引っ込めたトラップが、慎重に気配を探る。そして・・・

「こりやあ、周囲の壁が全部魔物みたいだぜ・・・キットン、分かるか？」

「壁の魔物ですか、デモンズウォールとかですか？」

「いんや、そこまで強そうに感じねえ。まあ皆上がってこいよ。あ、ちなみにそこらへんの宝石には触るんじやねえぞ？ あからさまな罨だからな」

そう言われてキットン、クレイ、パステルの順番で天井の穴へ飛び上がったいく。パステルが最後なのは勿論エチケツトである（笑）。

「あ、あれは・・・まさか『沼流沼羅』!？」

「何!?!知ってるのかキットン!?!」

急に劇画調に顔が濃くなつたキットンに、同じく『クワツ!!』と顔を濃くするクレイ。そして重々しく口を開くキットン……

「左様、私のモンスターポケットミニ図鑑(民○書房刊)にはこう書かれています……『沼流沼羅』、一見壁にしか見えない魔物ですが、光り物が異常に大好きな性格をしており、それを奪おうとすると反対に彼らのコレクションにされかねないという驚異のモンスター……ちなみに、かつての戦国武将・武田信玄が『動かざる事山の如し』『早き事風の如し』と言う名言を残していますが、それは普段は静かに抑えていてもいざという時は素早く行動を起こす事。その由来がこの沼流沼羅である事は間違いありません……」

「ぬう、げに恐ろしき魔物よ……」

「……ところで、いつまで続くの? その漫才……」

ジトツとした目で見てくるパステルに、ポンツと顔を元に戻した二人はケラケラと笑う。

「いやあく一度やつて見たかつたんですよね〜ww」

「分かるさ、その気持ち。『漢』なら一度はやらなきゃな!!」

「全く、ホントバカばつかなんだから……」

「おいおい、お前らホントにこの状況分かつてるのか? やつちまうのか放置しとくのか、さつさと決めちまおうや」

トラップの声に改めて周辺を見渡す三人。

あちこちに落ちてる宝石だが、拾えば間違い無く襲いかかってくるだろう。取り敢えず鑑定スキルを使ったトラップは、それらが本物とただのガラスとが混じつてる事に気づく。

「う〜ん、取り敢えず任務中に手に入れたお宝は好きにして良いんだよね?」

「けどまあ下手にコイツら全滅させたら、この洞窟がどうなるやら……」

「仕方ありませんね、それではスマートに宝石を手に入れつつ穴から退散するのでしょうか」

キットンがそう言うのと、スツと両腕を横に伸ばす。そしてブツブツ

と何やら眩いたかと思うと・・・フワツとした風が彼の周りに集まり、それが数人の小さな女の子に変わった。

「それではシルフ、私達を頼みますね」

『~~~~♪』

ニコツと笑った彼女達が周囲を回り始めると、四人の足がまるで羽のように軽くなった。

「うっし、それじゃ・・・」

「二」ドキドキ宝石強奪RTA始まるよ〜!!」二」

結局。彼らのとつた行動は至極単純である。要は・・・迫り来られる前に全てを取れ!!

「うっひよ〜!! 12字方向から接近中〜!! 接敵まで20秒〜!!」

「3時方向からは10秒〜!! 私はもう撤退するわね〜!!」

「おいキットン!? そっちはどうだ!?!」

「後2つですねえ〜!! ...回収完了しました!!」

「よし!! さっさと飛び込め〜!!」

そして次々と穴に飛び込む四人。その数秒後、穴は沼流沼羅によって塞がれたのであった。

「全部取れたのか?」

「取り敢えず目に付いたのは取れた筈ですが・・・」

「ふい〜、やっぱこのスリルがたまんねえよな〜。破壊無しって縛りはメンドクせえけど」

「ふふふ・・・ほくら、鑑定とかは帰ってからにして、早く先に進みましよっ。」

袋一杯に詰めた宝石を見ながらホクホクしている三人に、ニコニコした顔のパステルが先を促す。そう、まだダンジョンは始まったばかりである・・・上機嫌な四人は、さらに奥へと進むのであった。合掌。



## ヒーローニントの災難・・・7

無事に(?) 宝石を手に入れた四人だが、通路を進んでいると急に通路の奥から吸い込むように風が吹き込んできた。

「ちよ、ちよつとちよつとく!?」

「おおつと!? ちと強い吸い込みじゃね!?」

「キットン!! 頼む!!」

「ハイハイく。シルフ、お願いしますね?」

「くくくく♪」

急な事に少し驚いた皆であったが、そこはゴンタ学級のメンバー達。落ち着いてキットンが呼び出したシルフ達が無事に風を収める事に成功した。

「ふう、なんだったのかしら今の?」

「さあな。ま、取り敢えずオレ達を歓迎してない事は確かだろうな」

「助かったよキットン」

「グフフ・・・この程度の風で私のシルフ達をどうにか出来ると思ってるのでしようか・・・ww」

「キットン、物凄い悪い顔してるわよ・・・」

「とにかく先へ進もう。出来れば今日中に任務を終わらせたいしな」

クレイが皆を促すと、コクリと頷いた三人は改めて通路の先を進むのであった。

・・・

・・・

・・・

道中、やたら賑やかなラップバード達や変な薬草なども発見したが、あくまで今回の任務は怪しい生き物の調査。全てを無視して奥へ奥へと進んでいくと・・・

「あれは・・・」

「鏡?」

天井が七階建ての建物ぐらいに高い、吹き抜けの大広間にたどり着いた。その中央にはまるで鏡のように磨かれた面のある、大きな黒岩

が鎮座している。周囲には硫黄の匂いが充満しており、ここが温泉の源泉に近い事は明らかであった。

「ふむ、取り敢えず調べるしかなさそうだな・・・魔力は少しあるようですが・・・」

「・・・おい、キットン。何だか気配が高まってきてるぞ・・・」

「ええ、それも悪い雰囲気だね・・・」

クレイがすつとロングソードを周囲に構えると、同じく何かを感じたパステルが杖を取り出す。そして・・・それは起こった。

わあんわあんわあんわあんわあんわあんわあんわあん  
わあんわあんわあんわあんわあんわあんわあんわあん  
わあんわあんわあんわあんわあんわあんわあんわあん  
わあんわあんわあんわあんわあんわあんわあんわあん  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「うお!? なんかに出てきたぞ!!」

トラップが思わず周りを見渡すと、今まで硫黄の蒸気が噴出してた穴という穴から黒っぽい雲のようなものがわいて出てきた。そしてそれらは上空の方でひとかたまりになり、彼らの方へ急降下してきた。

「仕方ない・・・極・光・壁くくく!!」

それを見たクレイが咄嗟に力を解放すると、一気に四人を囲むように光の壁がそびえ立ち、皆を守るように空へ伸び上がった。謎の光の壁に勢いよく突っ込んでいく黒雲だが、光に触れる瞬間に浄化されて光と消えていく。

「やれやれ、流石にこの数から全員を守るには俺の『円』じゃ間に合わねーからな」

「やっぱりクレイのそれは緊急時には役立つわよね。あ、はいアルテナの水ね?」

「取り敢えず面倒そうな時にはクレイの極光!! 頼れる我らの守護神ですね!!」

「お前ら・・・さっさと他をどうにかしろよ・・・」

パステルから渡されたアルテナの水を一気飲みすると、改めて壁の維持に力を注ぐクレイ。流石に謎の敵も学習したのか、無鉄砲に突っ込む事はせずに周囲を回り始めるようになった。しかしどうやら簡単には帰ってくれないようだ……

「けれど、これって何なのかしら？」

「取り敢えずサンプルとして少し回収したいものですが、クレイの事を考えるとあまり時間はかけたくありませんねえ」

「しゃあねえなく……おいパステル、俺達で少し数を減らすぞ」

「は〜い」

極光壁を維持し続けているクレイの後方から、スツと出て来るトラップとパステル。光の壁の向こうではまだブンブンと音が聞こえる黒雲だが、さっさと帰っておけば良かったのは後の祭り。片手を出すトラップと杖を構えたパステルが同時に声を発した。

「くらいやがれ!! 火遁!!」

「星と月のソナタ!! いっけえ〜!!」

トラップの手から吹き出す炎と、パステルの杖から放たれる魔力の奔流はあつという間に黒雲の体積を減らしていく。そして大体全体の八割ほどが削られた時、ようやくそれらは穴の中へ戻っていった。

「全く、余計な体力を使わせやがって……」

「まあまあクレイ。あなたのお陰で皆助かったんだから。ありがとね」  
♪

「ふう、取り敢えず片付いたみたいだが……おいキットン? おめえ何してるんだ?」

極光の力は強力なだけに体力の消耗が激しい。折をみてはアルテナの水で回復していたクレイだが、力の放出を止めた途端にぐったりと近くの岩に腰を下ろした。肩を叩くパステルがニコニコと笑っているが、そんな中トラップが部屋の隅でゴソゴソとしているキットンに声を掛ける。

「いえいえ、もしかしてこれが任務書に書かれていた生物なのかと……しかしどうやら違うみたいですねえ」

「え? 何か分かったの?」

「はい、これは何処かの魔道士が人工的に作り出した生命体です。確か名前を・・・モウンと言った筈・・・」

「うん、それは良いから早く捨てなさいよソレ・・・」

ウンウンと頷くキットンに、ヒョコツと首を傾げるパステル。そんな彼女にキットンは言葉を続ける。ちなみに彼が摘んでいるそのモンスター(?)は、アゲハ蝶の羽を持った小さな蜘蛛で、僅か一センチにも満たない大きさだが・・・顔の部分が醜悪な老人の顔をしている不気味なものであった。そんな物を平気で摘めるキットンに、少し引くパステルであった。

「特に大した力は無いのですが、耳などから体内に入り込まれると、その魔道士の言いなりになってしまうとか。つまり、これが指し示すのは・・・」

「そいつが今回のターゲットって事だな」

「うくん、でもどうやって探すの?」

「そこはお前、明らかに怪しいこの岩を探るしかないだろう?」

コキコキと首を鳴らしながら黒岩に近づくとトラップ。そしてしばらくすると、『ソレ』に気付いた。

「ふくん、こうなってるんだな・・・取り敢えず・・・コイツ壊すか」

「ちよいちよい!? お前何言ってるんだ!?!」

「いんや、調べたんだけど解除が面倒くさくなった」

「それって、シーフが一番言っちゃいけない言葉よね・・・」

「ブヒヤヒヤヒヤww 流石トラップww 我々の事を良く分かっていますww」

「お前・・・ノルのこと笑えないぞ?」

「おいおい、あいつと一緒にしちゃ困るぜえ? 俺はゴンタ学級

一の常識人なんだからな?」

「何ですかソレww 実に笑えないジョークですわww」

正に大草原状態のキットンに、呆れたようにカクツと項垂れるパステル・・・しかしどうやら確かに通常の手段だと解除に時間がかかるらしい。勿論出来ないことは無いのだが、余計な時間はすぐさま報酬の減額に繋がる。それにもし破壊してマズイ類の罠なら、確実にト

ラップはこんな提案をしない。それが分かっている皆だからこそ、こんな風に笑い飛ばせるのだ。

「そんじゃま、適当に・・・」

「はい、魔法ロック解除。うに〜!!」

「おいバカ!! まだ話は終わってないぞ!」

ズツバ〜〜〜ン!!!

大慌てでトラップが手を出すも、軽〜く放ったパステルの『うにL evil10』は、凄まじい爆音と共に黒岩を跡形もなく消し飛ばした。勿論余波は広間一帯に広がり、岩に腰掛けていたクレイとキットンを暴風が襲う。

「ちよ、ちよつとまたいきなりかパステル〜!!」

「どっひゃ〜〜〜!!」

「ごんのバカ!! もし隠し通路まで破壊したまったらどうするつもりだ!」

「・・・てへ♪」

「てへ♪・・・じゃねえ〜よ!!」

情けない声をあげながらゴロゴロと転がるキットンを追うクレイ。そして煙が晴れたその先には・・・半分以上瓦礫に埋もれた階段らしきものが、ちらつと地面からコンニチワしていた。

「ほ、ほくら!! 結果オーライじゃない!? これで先に進めるわよ!」

「・・・この瓦礫、どかすの全部お前がやれよ?」

「・・・マジですか?」

「「マジ」」

「「ショボーン・・・」

無然とした男三人から抗議の声を受けたパステルは、ガツクリと肩を落として瓦礫の山へ向かうのであった・・・合掌。

## ヒーローニントの災難・・・8

どうにかパステルが瓦礫を取り除いた後（持つてる生きてるホウキ・ゴミ箱を総動員）、どうにか隠し階段を降りていく四人。

少し肌寒い洞窟内を歩いていると、ふとトラップが気づいた。

「お前ら気をつけるよ？　なんか足元が鏡みたいになってるからな」

「ホントだ・・・あれ？　よく見たら天井や壁も？」

「だな・・・皆、警戒を怠るなよ？」

キヨロキヨロと周囲を見回した。パステルが見たのは、周り全てが黒い鏡のような壁で出来た壁面であった。そして下へ下へと降りて行くほど、ますます寒さが増すのを肌で感じるクレイ。

そして、ようやく四人は最下層へたどり着いた。その目の前には、やけに怪しげな扉が雄々しくそびえ立っていた。

「ふくん、いかにもってドアだな・・・」

「トラップ、何か分かかりますか？」

「まあ待て。取り敢えず、お前らはここで待つて・・・」

「気をつけるんだぞ？　・・・まだお前に貸した150ゴールドが返ってないんだからな」

「そうそう・・・あなた帰ったらマリーナに告白するんでしょ？」

「ぐふふ、大丈夫ですよ。後はあなたに任せて先へ行かせて頂きますからww」

「てめえら何そんな俺に対して死亡フラグ建築しまくってやがんだ！！」

「「面白いから」」

緊張感ゼロの三人に吠えるトラップだが、ゲラゲラ笑う皆に、いつもの事だと首を振りながらドアを開けて中を確認する。勿論鍵がかかっていたが、そんな物トラップにかかればチョチョイのチョイであった。

「ホイホイっと・・・よし、行くぜ」

無事に鍵を解除したトラップに続き、三人もドアの奥へと進んでいく。そして最初に目に付いたのは・・・何やら大きなフラスコやビー

カーがたくさん積み上がっている、かなり大きな研究室であった。

「なんなんだ、ここ？」

「ふむ、どうやらモンスターに関する資料が

ほとんどですね・・・おお!! これはまた珍しい!! かの有名な『世界樹の葉』を使った新たな実験ですよ!」

「はいはい、取り敢えずその手の資料は後で回収するから」

「ちよ、ちよつと横暴な!? 私はあくまで自分の研究について・・・」  
パンパンと手を叩いたパステルがキットンから紙束を奪い取ると、必死になつて彼がピヨンピヨンと飛び跳ねるも・・・身長差は如何ともしがたい。結局諦めたキツトンは、先に進んでいるクレイとトラップを追う事に。

「そっういやさっきのモンスター、少し変な感じがしなかったか? こうなんて言うか、自然な雰囲気じゃねえっていうか・・・」

「あ、それは俺も思ったな。極光壁にぶつかった時に、なんだか煙のようになつて消えていったもんな・・・なあキツトン、何か分かるか?」  
「はい、それは勿論ですよ? だってあのモウンつて魔物は、実際には存在しないモノなんですから」

「え、そうなの?」

ヒョコツとパステルが首を傾げると、キツトンがピシツと人指し指を上げて話を続ける。

「さっきの資料をチラ見させてもらいましたが、今回の黒幕は人工の魔物を創り出せる魔導師。それも世界的に批判されている暗黒魔術の類ですね・・・一つ間違えれば、そこらの一般人が一国を傾かせる事も可能です」

「なるほど、それじゃあこれらの研究資料つてのは・・・」

「おおつと、クレイちゃん? その続きはあちらの御仁に聞いてみようぜ?」

進んでいた足を止めたトラップの声に、クレイ達が顔を奥へ向けると・・・少し古めかしい椅子に座つて、何やら作業台でゴソゴソと手を動かしている人影があった。

こちらに背を向けている為、顔は分からないが、体格は小柄。黒く

裾の長いローブを頭から被っており、いかにも魔導師といった感じの人物(?)である。

「お〜い、そのあんた。ちと話を聞かせて貰いたいんだけどよく? こつち向いてくれや」

「・・・うるさいねえ・・・人ん家に勝手に入るときながら、なんだい? その言い草は・・・」

いつでも攻撃体制に入れるよう警戒しながら近づくトラップの警告に、気怠げそうな声を出しながら作業を止める人物。声から判断するに、高齢の女だろうと検討をつけた四人。

「あく、俺達は牙の塔から派遣されてきたモンだ。取り敢えず大人しく話を・・・」

「ふん・・・傭兵を気取ってる犬らが・・・アタシの研究の邪魔はさせないよ!!」

「ちよつと、いきなり攻撃!? 危ないでしょ!!」

「ブヒヤヒヤヒヤ!! まるで昔のRPGに出てくる中ボスみたいですねww」

「てことはテンプレ通り、だな」

「ああ、取り敢えず倒すか」

振り向くや否や、無詠唱でファイアーボールを放つ老婆に対し、すぐにその場から飛びのく四人。一応警告した事に対するの反撃である為、どう繕っても正当防衛が成立である。すぐに武器を構える皆に対し、相手は感心したように声を上げる。

「ほお、アレを避けるかい・・・だったら遠慮はいらないね!! 出な!!」

老婆がバツと手を振り下ろすと、地面が大きく揺れ出し・・・大きな土煙とともに生気の無いゾンビのような魔物が10体以上飛び出してきた。それらが一斉に老婆を守るように立ち並ぶと、彼女はすぐさま背を向けて机の下へ潜り込む。

「やっぱり逃げる気か・・・つまんねえ行動だぜ」

「うくん、すぐに逃げるのはあんまりボスって感じがしないわね〜」

「全くです。あの人は王道を分かっています。逃げるならまず全ての部下がやられてから、『な、何!? 吾輩の部下が全滅だ!?』みたい



な会話をしてくれませんか」

「お前ら……さつきと追わないと任務失敗だぞ？」

「へーい」

クレイがはあつとため息をつくも、ケラケラと笑っている三人。相変わらずの余裕態度である。そんな彼らに対し、一斉に向かってくるゾンビ達。一般的に動きが遅いと言われているアンデットだが、このゾンビ達はなかなかの動きをしていた……まああくまで『一般レベルでの』なかなか、だが。

「あんまり資料を壊したくは無い。派手な攻撃や火は撃つな」

「はーいはいっと。取り敢えずクレイちゃんはさっきの極光の事もあらし休んでな。そんじゃまあ……しゅくりけくん♪」

仮にも極光の技は、生命力を大きく使う技。パステルの薬のお陰でそれらは完全に回復しているのだが、一応まだこれから使う可能性がある為、念の為に後方へ下がるクレイ。そしてトラップが懐から取り出したのは、複数の風魔手裏剣。それらを目にも留まらぬ速さでゾンビ集団に投げつける。外れる事なく人間でいう急所という急所に当たっていく手裏剣は、途端に敵の動きを鈍くしていった。

「フハハハハハ!! チェック・メイトだ!!」

「私も近づきたくないし、けれどアイテムは周りを吹き飛ばしちゃうのばかりだし……それじゃ、時の石版♪」

まるで某吸血鬼のように高笑いを上げながら手裏剣を投げまくるトラップの後ろから、魔法ロックを解除した『時の石版』をパステルが放り投げた。その石版から光が放たれると、一斉にゾンビ達が硬直する。勿論手裏剣は刺さりまくったままである。

「うわ、グロ……今晚お肉はやめとこ……」

「燃やすも破壊も無し、となりますと……ココはゼクンドウス、お願いしますね」

自分で硬直させておきながら顔を背けるパステルの横から、キットンがクワを掲げる。その先が光ったかと思うと、空間が割れ、中から謎の金髪男がノソノソと面倒くさそうに這い出て来た。髪はボサボサ、無精髭、そして極め付けは……『働いたら負け』Tシャツ。まさ

にNEET。

「ああ、だる・・・働きたくね・・・」

「ほらほらゼクンドウス、あなたの出番ですよ？ さっさと働いて下さい」

「いやさ、俺ってこういう時ばかり呼ばれる便利屋になってね？ そりゃあ確かに時の狭間に放り込んだら綺麗サツパリかもしれないけどさ、前に文句言われたんよ？ ハッシュユの爺さんに。あんまゴミ捨てるなって」

「知りませんよそんなの。ほらキリキリ働く!!」

「あく、ホント面倒くせく・・・」

気怠げなまま後ろ頭をガリガリと搔くと、片手をヒョコツと上げる。たったそれだけで黒い穴が空間に開くと、固まったままのゾンビ集団が次々に吸い込まれていった。

「はいお疲れ様でした。もう帰って良いですよ？」

「・・・報酬は？」

「取り敢えず五千ゴールドまで課金OK」

「よっしゃ!!」

現れてから一番気合が入った姿で元の空間に帰っていくゼクンドウス。どうしてこうなった？

「さて、片付いたか。すまなかつたな皆」

「いえいえ、それじゃあ早く先へ進みましょうか」

「トラップ、発信機は？」

「勿論付けたに決まってるだろ・・・お、こいつが隠し扉だな」

一番最初のファイアーボールに紛れて、相手のローブに向けてデコピンの要領で放った発信機は正常に動いている。それを追いながら、机の下の隠し扉を開けて進んでいく四人であった・・・

## ヒーelnニントの災難・・・9

発信機の反応を辿り、暗い隠し通路を軍用懐中電灯で照らしながら歩いて行くと・・・やがて先頭を歩いていたトラップが後ろの三人を片手で止める。先に光が見えてきたので出口が間近なのは確かなのだが、若干の嫌な気配を感じた彼が呟く。

「ちよい待ちな。どうやら奴さん、先で待ち構えてるみたいだぜ？  
しかも少し気配がブレてやがる」

「へえ、それはまた短い時間によく備えたわね」

「グフフ・・・本当はもっと準備をしたかったのかもしれませんが、もしかししたら慌てているのかもしれないねえ」

「とにかくさっさと終わらせないと、今日中に帰れないぞ？　総員、戦

闘準備」

クレイの静かな号令に、それぞれ臨戦態勢に入る三人。そしてトラップが黙って先の出口に歩いて行く。そして光の先に近くと・・・  
「「キシヤ~~~~~!!!!」」

出口の先から突然大きな奇声が響き、今にも通路から出ようとした四人を何かの集団が襲いかかってきた。

それらは体調50センチほどの、赤い巨大なコウモリみたいなモンスター。首から顔にかけては蛇のように長く、鋭い牙を構えながら無数に突撃してくる。普通のレベルの冒険者達ならたちまち総崩れになる程の勢いであったが、しかし・・・

「おおととと？」

「ちよつといきなり避けるなよ？　パステルに当たるだろ？」

「いやクレイがさらに避けなければ私に当たらなかつたわよ!？」

「ギャハハハ!!　まだまだ修行が足りませんねパステル!!」

まず先頭にいたトラップがヒラリと集団を右横に躲すと、それを見抜いていたクレイが反対方向に前転。結果三番手にいたパステルが、構えていた星と月の杖から砲撃を放つ事になった。そして最後尾のキットンは立ったまま大草原状態。まさに普段通りの光景。この程度の奇襲が通じる程、ゴンタ学級は甘くないのである。

「ホイホイつとく．．．お〜いパステルちゃん？ 撃ち漏らし結構あるぜ〜？」

「ウルサイわね〜!! そう思うならアンタも手伝いなさいよ!!」

「え？ 俺って結構平和主義者だし？ 余計な殺生はしない男なの」

「あれだけヒールニントの町を無茶苦茶にしておいて今更何言ってるのよ!」

「ほくれほれ、また一匹漏らした〜w ヘツタクソ〜w」

「おいおいトラップ、そこまですておかないとまた爆発するぞ？」

「とりあえず俺達は向こうに行くからな〜」

「流石にこれ以上地形を変えると、擁護しにくくなりますからねえ．．．報酬に響かなければ良いのですけど」

チユド〜〜〜〜〜ン!!!

ズバババ〜〜〜〜〜ン!!!!

真つ赤な顔になりながら『星と月のソナタ』を撃ち続けるパステルを、ケラケラとからかいながら彼女が撃ち漏らしたモンスターを手裏剣やクナイで狩っていくトラップ。口調とは裏腹に絶妙なコンビネーションで数を減らしていく二人に、残ったクレイとキットンは苦笑いしつつも、合間を縫って奥にいる魔導士に向かうのであった。

．．．  
．．．  
．．．

大きな池の近くにある切株。その近くでぶつぶつと呟いていた魔導士は、近づく足音に気づき反対を向く。その視線の先には竹のアーマーを着込んだファイターに、クワを持ったドワーフ(?)が立っていた。それを見た魔導士は『相手が二人ならイケる!!』と確信し、余裕たつぷりの態度で両腕を掲げる。．．．なかなか学習しない魔導士である。

「フアフアファ．．．そなたら二人で何が出来ようぞ？」

「う〜ん、取り敢えずさっさと帰りたいから．．．」

「前口上は良いですので、さっさとかかってきなさいw」

クレイが両手に構えたロングソードを見ても全く動じない魔導士だが、彼らに言われた言葉にはカチンとくる。まるで完全に無視された返答に、ザワザワと力が身体中を巡っていった。

「フアフアフア・・・威勢の良い事だ。まだ蓄えた力は満タンではないが、そなたらを消すには十分よ!! しねい!!」

「はい、『フアフアフア・しねい』いただきましたwwww」  
「笑ってないで集中しろキツトン」

ドガ~~~~ン!!

相手から放たれたファイアーボールは、避けた彼らの後ろの木をボウツ!と焼きつかせる。確かに直撃すれば・・・軽いヤケドくらいは負うかもしれない。多分。

「とうかクレイ、あなたなら避けなくても竹アーマーで無傷でしように」

「馬鹿、煤が付くと掃除に手間取るんだよ。結構合間合間の隙間が細かいんだから」

「・・・ハイハイ。それじゃ、私からいかせて貰いますね。フリーズラッサー!!」

キツトンのクワから放たれた無数の氷の槍が、追加のファイアーボールを放とうとする魔導士に向かっていく。晶霊を直接召喚するよりも、術式を唱える方が詠唱スピードが速い。それを見た魔導士が撃ち落そうと炎の玉を放つも、半分も迎撃出来ないまま身体に突き刺さっていった。

ズガガガガ!!!

「グ、グガア~~~~!!!」

「お、流石に一撃では倒れないな。それじゃ次は俺が・・・」

「良い気になるなよ貴様ら~~~~!!」

怒りで顔を歪ませた魔導士が連続して呪文を放とうとするも、一瞬で目の前に現れたクレイがそれを阻む。そして下段から上段へ向かって聖なる光に輝くロングソードを振り上げ・・・上空へ飛び上がった。

「な、なん・・・だと・・・?」

「あ、これは退避しませんと・・・」

「決める!! コネクティド・・・ウィル!!」

ズツバ~~~~~ン!!!!

飛び上がった上空から、更に大地へ向けて振り下ろす光の一撃。最初の切り上げでオーバークイル並みの攻撃であったが、最後の叩き下ろしで完全に周囲数メートルがクレーターと化した。勿論察したキツトンはさっさと遠くへ離れている。そして・・・魔導士の姿は影も形もなくなっていた。

「ふう、終わったか。いやあ久々にこの技使ってみたけど、やっぱり気持ち良いな」

「まあ、良いんですけどね・・・結局一撃で終わってしまいましたし」  
両手を広げてやれやれと首を振るキツトン。そこでふと思い出したように顔を上げた。

「そういえば、任務書に書かれていた謎の生き物って・・・今の魔導士で良いんでしょうか？」

「・・・あ」

聞こえたクレイがポカンと口を開けていると、そこへ後ろからやいのやいのと騒ぎながら歩いてくるトラップとパステルの姿が。

「だから、お前はメガフラム以外に攻撃する手段思いつかない訳!?!」

「何よ?! アンタだって私にばかり魔力使わせて、楽ばっかしちゃって!!」

「フン、省エネ運転と言つて欲しいね? 第一、お前が漏らした奴は残らず片付けてやったんだから感謝して欲しいぐらいだぜ」

「全くああ言えばこう言う・・・ん? どうしたの二人とも?」

クレーター近くで硬直している二人を見つけたパステルが、タツタツと駆け寄る。

「おいおいクレイちゃん、何ボンヤリしてんの? 折角の男前が台無しだぜ?」

「キツトンもどうしたのよ? 何か怪我でもしちやった?」

「・・・なあ、二人とも。任務書にあった『謎の生き物』って、こいつ

らの事で良いの、かな・・・」

「・・・あ」

そして、しばらく固まった四人が出した結論は・・・少し前にキツトンが捕まえたモウルを証拠として差し出す事に決まった。決して嘘ではない。確かに見た目は不細工な老人の顔をした蝶という『謎の生き物』なのだから。ウンウンと頷く四人は、着実にフラグを立てていくのであった・・・合掌。

・・・  
・・・  
・・・

「それで、そいつが今回の『謎の生き物』って事で良いんだな？」

「「はい」」

「ここは牙の塔の任務報告室。冒険者ギルドで言うところの、クエスト結果を報告する場所である。」

そして帰ってきた四人が纏めた報告書（主にパステルが記載・脚色キツトン）を読んだゴンタが、カゴに入れられたモウルを見て口を開いた。大柄な身体に相応した太い腕を組み直す姿は、いかに彼らでも簡単に敵う相手ではないという風体をしている。

「いやあ大変だったぜ？ 結局二日かかっちゃったし、服は汚れるし」

「あ、それと例の送っておいたヒールニントの村の件もよろしくお願います。あれは完全に俺達は正当防衛と考えてますので」

「あくあ、結局温泉入れなかったな。取り敢えず今度ルーミィー達と旅行に行こつと」

「グフフフ・・・それでは、取り敢えず・・・」

「「報酬下さいな!!」」

バツと手を差し出す彼らに、ゴンタは黙って一通の封筒を手渡す。いそいそと開いた封筒から出てきたのは、一枚の紙。

「・・・これ、何？」

「請求書・・・？」

怪訝そうな顔をして覗き込む四人に向かって、ゴンタは重々しく口を開いた。

「ヒールニントの村に関する被害は・・・まあチャラにしてやろう。一応カメラによる証拠もあるし、何より牙の塔が舐められる訳にもいかんからな。しかしだな・・・」

そこで一旦区切った彼は、すうつと息を吸い込むと・・・一括を浴びせた!!

「山の被害が甚大すぎるんだお前達は!! 山の持ち主であるゼンの婆さんから速攻で苦情が来たんだぞ!! しかもご丁寧にくつもクレーターこさえおって馬鹿者が!!」

「いや、半分はパステルが・・・!!」

「あ、ズルイ!! それを言うならクレイだつて・・・!!」

「わ、私は今回作ってませんからね!」

「お、おいキットン、一人だけ抜け駆けするんじやねえぞ!」

実に醜い罪のなすりつけ合いを始める四人に、ドカンと机に拳を叩きつけるゴンタ（勿論その程度で壊れるような柔な机では無い）が黙った四人を睨みつける。

「良いから黙れ。とにかく、期日までにキッチリ振り込むんだ。分かったな?」

「二・・・へくしい」

ガツクリと項垂れたまま報告室を出る四人。一応、道中手に入れた宝石を売ればトントンには持ち込めるだろうが・・・まだ彼らの目は諦めていない。きつと我らが林水会長なら、裏金にC会計を駆使して助けてくれるはず!!・・・本当に懲りない四人である。

「いいか、お前達。出来るだけ俺達に非がないように話を作るんだ・・・」

「分かっていますよ・・・こんな事で折角手に入れた宝石を売るなんて馬鹿げてますからね」

「うんうん。只働きなんて一番意味ないんだから・・・」

「そんじやまあ、交渉は俺に任せな。お前達は出来るだけ真剣な顔で



頼み込むんだぜ？」

「全ては・・・」

「『俺達の平穏な毎日の為に!!』」

そして、あつさりと林水から不許可と言われて轟沈するのは、それから僅か数分後の事であった・・・合掌。

謎の地下工場・・・  
謎の地下工場・・・？ 前編

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

鬱蒼と茂る木々の間の道路を、一台の軍用輸送車が砂煙を立てながら走っていた。車両の装甲は厚く、そんじやそこらのモンスターが攻撃など屁ともしない。そんな無骨な車を運転席から操る赤髪の男は、後部座席に座っている面々の内の一人に声をかける。

「おくいパステルく、本当にこの道で大丈夫なんだよな？」

「大丈夫の筈よ？」 衛星マップはちゃんとこのまま真っ直ぐってなってるから」

「うむ、俺の作った機械に不具合は無い」

「だったら良いけどよく、パステルの案内だどっか不安になるからな」

「ちよつと、何よそれく!!」

「・・・」

少しガタガタ揺れる車内なので気持ち大きめの声を交わすトラップとパステル。間に挟まれたノルの声は見事にかき消されている。

「それにしても、ホントに温泉旅行なんて当たるもんなんだな」

「グフフ、きつとクレイが買っていたら間違いないくポケットティッシュ・・・いえ、むしろそれすら在庫切れの可能性すらありえますからww」

「・・・否定出来ないのが悲しい」

ガクツと項垂れるクレイを見てギヤハギヤハ笑うキットンだが、それを見た一人の可憐な少女が慰めるように彼の肩を叩く。

「大丈夫だよ、クレイ。そんな簡単にポケットティッシュは無くならないよ？ それに無いなら無いで他の粗品を用意してるから元気出して、ね」

「・・・ルーミー・・・段々雰囲気がお蓮さんに似てきているぞ・・・」  
「え？ そ、そうかな・・・少し嬉しいかも♪」

「ドヒヤヒヤヒヤ!! 皮肉が通じない辺りもそっくりですね!!」

少し照れが入ったようにはにかむ、ふわふわしたシルバーブロンドの髪の少女。どこの西洋人形かと思紛うほどに完璧に整った容姿はやはりエルフの血だろうか。かつては、

『ぱくくうく!! るくみいくおなかペッコペコだおく!!』

と駄々をこねる元気少女だったが、牙の塔で成長するにつれて可愛さはさらに磨きがかかり、すっかり落ち着いてきた雰囲気は彼女の美しさを際立たせている。背も年相応に伸び、今は中学生ぐらいに見えるのだが・・・残念ながらまだまだ胸の成長は遅いようだ。合掌。

「それにしても、会長とお蓮さん達は残念だったよな」

「まあ仕方ないじゃ無い。会長はお仕事に、お連さんは居酒屋。イルイちゃんとアルフィミーちゃんは機体の総点検とか言ってたし」

「ああ、確かに二人の機体はなあ・・・」

クレイがパステルの答えに苦笑いしていると、ノルがポツリと答えた。

「うむ・・・あの二機だけで整備班がフル出動だからな」

「そ、そうだね・・・」

それもそのはず、片方は大きさが半端ない程に大きく、もう片方は明らかに見た目が機械では無い。むしろどうやって牙の塔の格納庫

に入れた？ 謎である。

「んで、あの勇者賢者兄妹は・・・」

「きつとまた裏世界の魔王でも退治しに行ってるんじゃない？」

「・・・もしくは遊びに行ってるか」

「グフフフ、どっちにしてもうるさそうですねえww」

「キットンほどじゃないと思うけどな」

ちなみにレックス・タバサ兄妹の行動は全く予想がつかない。基本的にゴン太学級に所属はしているのだが、完全にそれを把握しているのはゴン太先生か校長のうっちゃんぐらいである。上手く教室で会えればラッキー程度の存在なので、皆もあまり気にはしていない。・・・というか、常に居られると迷惑である。主に騒音的な意味で。

「ま、たまには良いんじゃない？ 俺たち初期メンバーで旅行つてのも」

「そういえば確かにそうだな。なんだか最初の頃が懐かしいな・・・」

「そうそう、今から行く温泉つてこの間のヒールニントよりも効能が良いらしいわよ？」

「ギャハハハハ!! 一回も入っていないどころか、トラップが散々に破壊してくれましたけどねwww」

「うるせえなく、俺がジャンケンで負けていたらお前らがやってただろくが」

「ル、ルーミイはそんな事、しないよ？」

「・・・無自覚に引き起こす災厄の方がたちが悪い」

「[[「うんうん」]]」

「ちよ、ちよつと皆?! せ、せめてノルにだけは言われたくないよおく!!」

丸太のような腕を組みながら呟くノルの肩を慌てたように揺さぶるルーミイ。それを笑いながら見守る皆・・・こんな風に実に賑やか

なノリで交わされる会話だが、決して中身に突っ込んではいけない。  
お兄さんとの約束だ、いいね？

・・・  
・・・  
・・・

「・・・トラップ、少しその先を左に曲がってくれ」

「あん？ 珍しいなノル。お前がそんな主張するなんて」

「その先に、良い釣りポイントがある。景色も良い」

「あくいよ。時間は充分あるし、寄り道すつか。お前らも良いよなく？」

「「オツケく」」

先程の会話から1時間ほど走った先、唐突にノルが運転中のトラップに声をかけ、彼はハンドルを左に向ける。ちなみに今更だが、彼らは現在とある温泉施設に向かっている。パステルが商店街の福引きに当たり、それを発見したトラップがすぐに教室の周囲に拡散、そして今に至る。

勿論歩いて行くななど論外。そしてヘリポートや飛行場がその旅館に無い以上(ある方がおかしい)、必然的に車となるのは仕方ない。勿論貸出許可は牙の塔の管理部門からもらっているので安心である。

そんな一個部隊相当(比喻でなく)のメンバーが走る道の先が開けていくと・・・何とも素晴らしい光景が広がってきた。

「へえ、以外じゃない？ ノルがこんな場所を知ってるなんて」

「いや、たまたま知っていただけだ。近くで作戦があった事があったな、その関係だ」

「あく、確かミスリルってやつ？」

「うむ」

停めた車から降りたパステルが思わず口を開いたこの光景。大きく開け、底が見えるほどに透明な湖に、それを囲むように茂る木々。晴天である事も重なり、正に絶景とも言える風景が広がっていたのだった。

「キレイだね・・・」

「ああ、たまにはノルの言う事も聞いてみるもんだな」

「・・・たまには、とは何だ」

「グフフフフ・・・ん？ 何か変な気配を感じますよ?」

湖面に手を差し入れながら微笑んでいるルーミィに、トラップがノルに茶々を入れている・・・と、その時キットンが不意に近くの地面に目を落とす。すると・・・

モコモコモコモコモコ・・・ポコポコポコ!!

「あ、あれは・・・フラワーアースドラゴン!?」

「何!? 知ってるのかキットン!?」

「うむ!!」

「あく、またこのパターンね・・・」

クワツ!!と目を見開き、どこかの男○のように顔が変わるキットンとクレイに、パステルは『はあく』とため息を吐く。

「花土竜《フラワーアースドラゴン》・・・永き間土の中で過ごすうちに、ついに竜の称号を得た魔物。その強靱な腕は大木を軽くなぎ倒し、咆哮は嵐を巻き起こすと言います。頭の花は育つと世界樹に匹敵し、やがて世にも不思議な花を咲かせるとか・・・ちなみにかの有名なフシギバナが背中の花をトレードマークにしていますが、その大元はこのドラゴンが由来と言うことは周知の事実かと」

「ぬう、げに恐ろしき魔物よ・・・」

「よくハナモグラをそこまで言えるわね……て言うか、なんだか説明がどっちかと言うとポケ○ン図鑑に近いような……」  
「言うな」

パステルのツツコミに答える間もなく、ポコポコつと顔を出すつづらな瞳の可愛いモグラ達。ずんぐりとした体型に頭の花がヒラヒラと揺れる姿はなかなか可愛いのだが……出てきてすぐに二本足で走り出す姿はどこかシユールである。

そして、そのすぐ後に『なぜか』湖近くにあつた蓋つきゴミ箱から二人の軍服男がマシンガンを持って飛び出してきた。

「さあ〜!! 一匹残らず捕まえるのよお〜!!」

「あつ?! 野生の人間達が飛び出してきた?!」

「だ、だから……いえ、もう良いわ……」

「ほ、ほら元気出してパステル? 取り敢えず深呼吸してもう一回、ね?」

「……いや、別に言葉に詰まった訳じゃないんだけどね?」

今度は何処からともなく取り出した赤い帽子をかぶって何やら構えを取るトラップに、もう疲れたと言った表情のパステルをルーミイがポンポンと肩を叩いて慰め(?)ている。

「んで、どくするよクレイちゃん……って、もういないよな、やっぱ」  
「待てい!!」

すぐに飽きたのか、頭の後ろに手を回して横を向くトラップだが……当然既にクレイの姿は無い。明らかに片方の人間側を悪とみなした彼は、颯爽と間に立ち塞がった。

「な、なんなのよ貴方は〜!?!」

「純なる魔物の心を操り、自らの欲望を達しようとは悲し……人はそ

う、『エゴ』と言う!!」

「だ、だから誰なのよ〜!!」

「お前達に名乗る名前は無い!!」

パチパチパチパチパチパチ〜♪

シャキーン!!・・・という音は聞こえないが、正に後光が差すかのようなクレイにパチパチと拍手を鳴らす皆。しばらく呆気にとられていた軍服男二人だったが、やがて我に帰るとジャキツとマシンガンを構えた。

・・・命知らずな。

「何よ!! ジャマするなら容赦しないわよ!?!」

「おうおう、コイツらどうするよ? 俺達に銃向けちゃったよ」

「・・・撃つていいのは、撃たれる覚悟のある者だけだ」

「だったらノルよ、お前何人ぐらいから撃たれるんだ?」

「・・・100人から先は覚えていない」

「だから無視するんじゃないわよ〜!!」

ムキーン!!つとばかりに顔を真っ赤にしながら怒鳴るオネエ系男だが、そんなのは彼らに関係無い。例え向けられる数が100倍になっても鼻歌交じりで切り抜けられるのだから、たかだか二丁構えられているだけで危機感など湧くはずがない。豆鉄砲のようなものである。

しかしまあずっと銃口を向けられているのも気分は良くない。となると・・・

「ほいっとな」

「むん」

スパ〜ン!!

ペシャン!!



「・・・え？」

クレイが目にも止まらぬ速度で振り抜いたロングソードは銃を一刀両断にし、ノルが両手でパチンともう一人の銃を挟むと万力で潰されたようにペシャンコになった。何が起こったのか分からない軍服男達だが、ようやくされた事を理解したのか大慌てで逃げ出した。

「ちよ、ちよつとこんな聞いてないわよよ!? ここは戦略的撤退だわよよ!!」

「ま、待つてくださいよよ!!」

もうハナモグラの事など知らないとはかりに元のゴミ箱(?)の中へ飛び込んでいく二人をそのまま見送ると、取り敢えずポケよつと立ち止まったままのハナモグラ達にノルが話しかけた。

「モグ、モグモグ、モグモグググよよ?」

「モグ!? モ、モグ、モグモグモグ・・・」

「モグモグ・・・」

「モグよよ (泣)」

「・・・そう言えばノルって、ボンタ君語も理解してたわね」

「ノルって、やっぱり凄いな」

何やらシミジミと頭を下げるハナモグラ達の肩をポンポンと叩くノルを、胡乱げな表情で見つめているパステルと感心しながら見つめているルーミィ。果たして、彼らから明かされるゴミ箱の中の真相とは? 後半に続く!!